富士山世界遺産コラム　　2024年7月1日《vol.26》

「かぐや姫の物語」と『竹取物語』

〈静岡県富士山世界遺産センター　学芸課　准教授　青木　慎一〉

昔ばなしとしても伝わる「かぐや姫の物語」や現存最古の物語文学である『竹取物語』のことを知っている方は少なくないでしょう。しかし、「かぐや姫の物語」と『竹取物語』では話の展開に違いがあることを知っている人はどれだけいるでしょうか。特に、富士山との関わりに着目すると、両者には大きな違いがあるのです。そこで、今回は「かぐや姫の物語」と『竹取物語』の違いについて紹介したいと思います。

一般的に「かぐや姫の物語」と称する場合、話の中心はかぐや姫の行動です。その物語は、「（略）竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり」（訳：竹の中に、なんと根元が光る竹が一本あったのである。ふしぎに思って、そばに寄って見ると、竹筒の中が光っている。その竹の中を見ると、三寸ばかりの人が、たいそうかわいらしい姿でそこにいる）と、竹取を生業（なりわい）とする翁（おきな）によって姫が竹の中から見つけられ、「車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ」（訳：そのまま飛ぶ車に乗って、百人ばかりの天人を引き連れて、月の世界へ昇ってしまう）と、迎えにきた天人とともに姫が月へ帰る場面で結末を迎えます。

一方、『竹取物語』はかぐや姫の昇天で物語を閉じず、後日談が続くところが大きく違います。『竹取物語』において、残された翁（おうな）・嫗は思い乱れ、生きていても甲斐がないと薬も口にせず、病に臥（ふ）せってしまいます。また、姫と親交を深めていた帝（みかど）は、物思いに沈みます。このように『竹取物語』では、地上に残された人々の様子が語られるのです。

翁と嫗に関してはこれ以上言及がありませんが、帝は悲しむばかりでなく、次の行動を起こします。月に帰る前、姫は帝に手紙と不死の薬が入った壺を渡していました。帝はそれらを用がない物として焼却するよう命じます。そして、その焼却の場として選ばれるのが富士山です。

帝は「いづれの山か天に近き」（訳：どの山が天に近いか）と臣下（しんか）たちに問い、ある者が「駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る」（訳：駿河の国にあるといわれる山が、この都にも近く、天にも近うございます）と奏上（そうじょう）したことで場所が決まりました。そして、帝はその山頂で手紙と不死の薬の壺を火をつけて燃やすよう仰せ付けます。

ここでは富士山という固有名詞は用いられません。物語では帝の命を受けて「士（つはもの）どもあまた具して山へのぼりけるよりなむ、その山を「ふじの山」とは名づけける」（訳：士どもをたくさん引き連れて山に登ったことから、この山を「士に富む山」、つまり「富士の山」と名付けたのである）と、洒落のように山の名の由来が語られます。

物語は「その煙、いまだ雲の中へ立ちのぼるとぞ、いひ伝へたる」（訳：その不死の薬を焼く煙は、いまだに雲の中へ立ちのぼっていると、言い伝えている）という一文で閉じられます。物語が作られた当時、富士山は噴煙（ふんえん）を上げる活火山と認識されており、手紙と薬を焼く煙と重ねられました。

このように富士山という視点で物語を読むと、富士山が出てこない「かぐや姫の物語」と富士山が出てくる『竹取物語』という違いがあり、『竹取物語』ではかぐや姫の手紙と不死の薬の壺を焼く場が富士山だったのです。

※『竹取物語』の本文と現代語訳は、新編日本古典文学全集（小学館）を引用しました。